

か?」と仮に利用者から質問を受けた場合、どのようにわかりやすく答えるか。ということに参加者より意見発表をしていただいています。日常何気なく使っている「権利」という言葉を、改めて考えるとやはりきちんと認識しておくべきだと強く感じました。

学習会当日、市内は突然の激しい雷雨に見舞われ、マイクにも少し影響が出たりしましたが、三田先生からの熱のこもったお話しで、どんどん引き込まれていくような状況でした。

慌ただしい日々の活動に追われるなかであります、原点に戻って振り返りをおこなうこと。これは支援者としても大事なことであるし、一人の人間としても自らの土台を作るうえでも必要なことではないでしょうか。

学齢期・就労合同部会

「地域での総合的な就労支援体制について」

平成23年9月8日(木)、大阪市育成会学齢期・就労合同部会を実施しました。

大阪市就業・生活支援センターより前野哲哉副所長にお越しいただいて、「地域での総合的な就労支援体制について」というテーマでお話しいただきました。

まず、特別支援学校を卒業された方が、就職あるいは地域生活ではなく、障害福祉サービス利用された方がその後一般就労する割合がとにかく低いのではという疑問を呈示していました。そこで現行法における就労支援施策の全体像を見ながら、段階的に就労を目指す人がどういう流れに沿ってすすめていくのかのイメージを示されて(もちろん人によって段階の進み方や時間の要し方は異なったりはしているが)、その流れの中で、それぞれの施策(福祉施策・雇用施策)がどういった目的・内容・位置づけなのかをきちんと把握しながら、どういった段階で・何のためにこの事業所を利用するかを認識しておかねばならない。その実践は当事者を支える親も支援者も自覚しておいたほうがよいのではということでした。

就労を目指す方に対して、サービスを提供する事業所はどういった役割を果たすのかという点について考えると、サービスを提供する事業者は、(訓練等給付を利用する方に)まずアセスメントをおこない、個別支援計画の作成と実施、そして評価結果をまとめて、そのサービスの内容が(就労の観点から)適切か否かを判断して今後のサービス利用について調整をすること。これは約款上でもそうになっています。そのなかで重要なことは、初期の段階でのコーディネート。すなわち就業適性を見極めることと、そのためにどういうプロセスを踏んでいけば

よいかということではないでしょうか。そこで先述したように、各事業を正しく理解することが必要なのだという事です。

後半は実際に仕事を身につけていくうえでの支援についてです。

実習などの意義として、その当事者の状態像を把握できること。何かを「試行」するから、何らかの結果や反応が出てくる。そのことにより、個別課題が積み重なり支援の手法について整理できる。だから実習そのものについて、「しんどくなるから・・・」「無理だろうから」という予測から避けていては、結局何も把握することができなくなってしまう。(新たに)何かをするということは大変なことかもしれないが、何もしなければ何もわからない。「試行」することは、具体的支援を受けて成果を出すうえでは重要なことだと理解しておかねばならない。計画性(プランニング)が成功のカギを握っている。

次に具体的支援(ジョブコーチ支援)の中身についてですが、個別の目標設定の大事さを説いておられました。

例えば、基本的には休まない(それなりに作業をおこなう)。時間を守る。部屋をきれいに(掃除は高度な作業である)。挨拶・返事をきちんとする。こうしたことは、雇用する立場からも重視しているところであり、作業能力以前にそうした点への心構えをもってもらうことが大事である。制度上のジョブコーチの支援実績でいえば、障害種別では知的障害者が圧倒的に多いが、支援を受けることで職場に定着する割合は高くなっている。

企業側の人材育成支援の視点から(障害者雇用ではなくあくまで人材管理する側から)見たその促進要因として多く挙がっていることとして、管理体制の面では、
・本人の相談相手がいるか
・管理者の相談相手がいるか
もう一方で業務対応の面では、
・関係知識の取得、
訓練要素の改善
が高い割合になっているそうです。

そこで、いずれの業務プロセスの面からも、ジョブコーチ活用は課題解決の手法として大きく役割を果たしています。これは雇用している事業主側からもそうですが、雇用されている障害者の立場からも、不安を抱えながら仕事を始めていくうえではとても大きな存在であるといえます。

巻頭の記事にあるように、障害者制度改革のなかで就労支援についても議論されているところです。

しかしながら色々とうかがっていくなかで、事業の内容を理解しておくことと、状況を前向きにとらえることで、将来に向けてしっかりと展望が開けるのではないかと強く感じられたお話しでした。